



石井茂助—語り伝えたい初代事務官

大学昇格後の本学の発展につくし、その献身ぶりは「茂助坂」という呼称に刻まれている

石井茂助は大学昇格後の本学の発展のために身を粉にして働き、後輩事務員の育成とキャンパス環境の整備にも力を注いだ。不幸にして、在職中に亡くなったが、桜の美しい大岡山キャンパスの坂道は、彼の功績を称え、いつしか「茂助坂」と呼ばれるようになった。年史で事務職員が取り上げられるのは珍しいが、石井さんは本学の六十年史、百年史、130年史で紹介されている。130年史では肖像写真入りだが、他大学の図書館の本からの転載で画質が悪く、少し失礼な仕上がりとなっている。綺麗な写真を見つけないものだと思っていたところに、偶然にも石井さんのお孫さん（松田克子）から連絡が入った。「実家の片づけをしているが、東工大関係の資料もあるので必要かどうか見て欲しい」というのだ。願ってもない話で、さっそくお邪魔することにした。その時に伺った私的な話を交えながら、石井さんの仕事ぶりを紹介したい。百年史によれば、石井さんは、本籍地を生まれ故郷から本学内に移すほど、一身を本学の発展のために献げた。諸施設の充実、事務運営上の諸制度の整備といった面での働きも極めて顕著であり、中村幸之助学長が厚い信頼を寄せた事務官であった。本学を職場として選んでくださった事務職の方々にも本稿を読んでもらえれば幸いです。

1. 本学の事務官となるまで

自己研鑽

石井茂助（1897〔明治30〕～1948〔昭和23〕；写真①〔注1〕は福島県岩瀬郡須賀川で生まれた（子供11人中の10番目）。家は有名な牡丹園の傍らで、藁葺屋根だった。岩瀬郡立農学校を卒業後、上京し、文部省雇となり（1916〔大正5〕）、大臣官房 会計課に勤務する傍ら、私立大学の夜間部で勉学に励んだ（p.8, 表）。その後、明治専門学校、東京商科大学、姫路高等学校等の書記を経て、1926年〔大正15〕文部省 大臣官房 会計課 予算掛長 兼 決算掛長に任命された。翌年、新設官立大学創立委員補助を命ぜられ、本学の創設準備を担当することになった。1929年〔昭和4〕、東京工業大学の発足〔注2〕と同時に本学初代 事務官（現在の事務局長）に就任した。

経理事務講習所で後輩の育成も

この間に、東京商科大学（現一橋大学）〔注3〕に会計官吏を養成するための「経

理事務講習所」〔注4〕が開設（1924〔大正13〕～1931〔昭和6〕、7年間）されると、石井さんは本務の会計課の仕事の傍ら、講習所の講師も務め、積極的に後輩の育成に関わった。講習期間は1年間で入学資格は30歳以下；給費制で修了後は2年間の役所勤めが義務付けられており、折からの不況で就職難であったこともあり、25名前後の枠に多い年では30倍近い志願者が殺到した。講習所は、組織上は東京商科大学に属していたが、実際の講義や実習はすべて震災後のバラック建て文部省構内で行われた。開設期間は7年間と比較的短かったが、この間に170名の卒業生が巣立ち、

そのうちの12名が事務局長にまで登りつめている。事務職員のキャリアパスと能力開発に力を発揮していた経理事務講習所がわずか7年で廃止されたのは不思議だが、世界的な不況下で、当時の政府がとった緊縮政策による経費節減の煽りを食ったようだ。〔注5〕

事務職員としてのキャリアに磨きをかけたいと強く思った人たちの集まりだっただけに、講習所の同窓会である「文経会」の活動にも目を見張るものがあつた。『文経会雑誌』を1926年〔大正15〕12月の創刊号から1935年〔昭和10〕7月まで、計16



① 石井茂助



② 石井さんが着任した頃の大岡山キャンパス

冊 刊行している(注6)。内容は、論説・研究論文に加え、小説やエッセイ等の文芸作品及び雑録などからなる。会員の動静や年1回の総会の様子を伝える「文経会会報」は、新入会員が途絶え、多くの会員が現役を退いた1978年(昭和53)頃に創刊され、長く発行され続けた(確認できるもので、No. 18, 1989.1.10が残されている; No. 3は1979.12.15発行)。

2. 着任早々の度肝をぬく行動

「経理事務講習所」出身の板谷健吾(3回生, 1905*~1985, p. 8写真④)は、石井さんより2年早く、1927年(昭和2)に大学昇格前の東京高等工業学校(本学の前身)に会計課要員として配属されていた。二人は講習所で師弟関係にあった。本学の大学昇格(1929, 昭和4)を機に、一緒に仕事をする事になって、板谷さんは石井さんに対する尊敬の念を深めた。石井さんの最初の仕事が衝撃的なので、板谷さんの述懐(注7)を辿ってみよう:「石井さんは、大岡山にお出になると、早速 構内にバラック建の宿舎を設けられたのです(図2)。それは、全く仕事本意のもので、四六時中、食事時は勿論、廁の時も構想を練ると言うことで、一分の無駄もしないお考えでした。而も、その宿舎の立地条件は、快適どころか、むしろ悪条件の、目蒲線と大井町線の傍らで(現在の80年記念館の辺り)、一日中 電車の轟音が激しい所だったので。バラック建ての宿舎は全職員の心をつかんだに違いない。

3. 大岡山キャンパスの飛び地状態の解消と整備(注8, 9)

震災を機に大岡山へ移転

関東大震災によって蔵前キャンパスが灰燼に帰すと、当座の措置として(1)駒場の東大農学部の一部を借りて、午前・午後の2部形式で授業を再開し、(2)機器や装置を必要とする学生実験や3年生の卒業研究は被害を免れた他の学校・試験所・会社

表 1. 土地交換に絡む疑惑(復興局疑獄事件)

土地の所在地	面積(坪)	坪単価(円)	総額(万円)	転売額(万円)	田園都市株の転売益	田園都市株の購入額と評価額の差
蔵前	12,235 (約4万㎡)	150	184	240	①約56万円 (今日の50億円強の巨利)	
大岡山	91,793 (約30万㎡)*	20 (地主からの購入単価: 8~9円/坪)	184			②約100万円** (今日の100億円超の巨利)

* 現在の敷地面積は約24万㎡で当初の約30万㎡より減っているが、これは当初の飛び地状態(図2③)を解消するために、再度土地交換を行ったため。

** 大岡山地区の評価額184万円(=20円/坪×91,793坪)に対し、実際の取得額は約84万円(8~9円/坪×91,793坪)で差額は約100万円となる。

の研究所等に学生を分散委託することにした。そして、隅田川脇の蔵前の地は、河川の汚染問題に加え、敷地が過密になりつつあったので、(3)新キャンパスの獲得に乗り出すことになった。(注8, 9)

移転先の有力候補として浮かび上がったのが田園都市株式会社(現東急)が所有していた大岡山地区だった。震災からわずか4か月後には、田園都市(株)との間で土地の等価交換が成立し、仮校舎等の建築が始まった。大岡山の土地は蔵前キャンパスの7.5倍の広さに相当するゆえ、一見理にかなった交換のように思えるが、後に「復興局疑獄」として問題になる策謀が仕組まれていたようだ。土地の取得には、国の機関である「関東大震災復興局」が関わり、学校側は直接関与していないので、東京高等工業学校側には何の責任もないのだが、移転の裏話として「疑獄」の間に迫ってみよう。(注10)

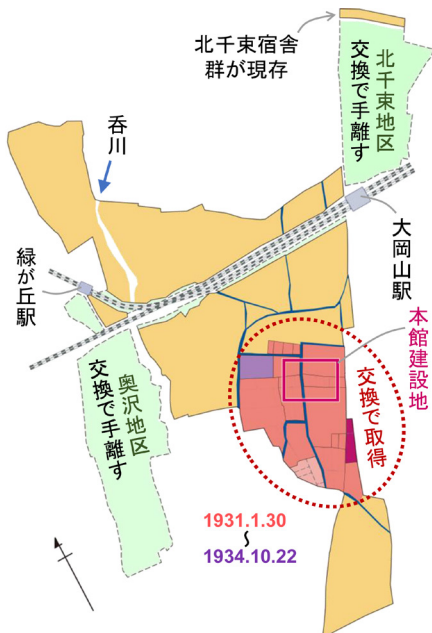
復興局疑獄事件の舞台となった土地取得(表1)

土地を提供した田園都市株式会社は等価交換という名目のもとに今日のお金で100億円近い巨利を得た上に、そのわずか4か月にも満たないうちに、交換で得た蔵前の土地を国(関東大震災復興局)に1.3倍の価格で転売し、現在のお金で数十億円もの巨利を得た。合わせて150億円を超えるとなると、どう見ても異常で、キナ臭い噂が立った(表1)。復興局疑獄

事件として捜査のメスが入り幹部官僚(復興局の整地部長、経理部長、土木部長)の逮捕や自殺にまで発展したが、巨悪はうやむやのまま、新聞社や新聞記者までが買収され幕引きとなった。64年後の1988年に、この疑獄にメスを入れたのが猪瀬直樹で、不自然なタイミングでの人事異動や捜査逃れが疑われる長期外遊、さらには残された財務資料等を徹底的に分析し、隠された数字を読み解くことによって「巨悪」に迫っている。その推論過程は猪瀬さんの著書『土地の神話』(注10)で辿ることができる。猪瀬さんは、「5,000万円の借金」がもとで都知事を辞任(2013)しているので記憶している人も多いだろう。

2回目の土地交換で“飛び地”状態を解消し、一続きのキャンパスを実現

当初の大岡山キャンパスは、南北に分断され飛び地状態になっていた(図2&③)(注9)。田園都市(株)が将来の沿線開発を見越して大岡山地区の土地取得に乗り出した時には、現在本館や南1号館があるエリアは既に住宅地となっており、買収できていなかったからだ。飛び地状態では不便で将来に禍根を残しかねないということで、石井さんたちは、現在の北口商店街エリア(北千束地区、清水窪地域)と呑川以西の緑ヶ丘3丁目・奥沢1丁目近辺の敷地(玉川村・碑衾町石川端地域)(図3, 緑)を交換用地として手放す代わりに、本館とその南側のエリアを入手するべく交渉を始めた。



③飛び地状態を解消した第2回目の土地交換（緑の部分を手離し、赤の部分を取得）。

敷地の整理（飛び地の解消）には、250戸を超える民家に立ち退いてもらう、すなわち交換に応じてもらう必要がある、それも大学昇格を控えての短期間だったために、トラブルになったケースもあったようだ。住民からすれば、心情的には立ち退き反対ゆえ、頑として交換に応じないものがあり、暗雲が立ち込めた。一時は新天地を求めて再移転まで検討されたようだが、それでは東工大をあてにして引越してきた商店街の人たちが困るということで、再移転にも反対の声が上がった（注11）。最終的にどのようにして飛び地の解消に成功したかは記録に残されていないが、石井さんたちの心労は並大抵ではなかったと思われる（注12）：立ち退き反対派の人たちから見れば、活動的な石井さんは目障りだったに違いない；地元の暴徒に脅迫されもしたようだ。（注13）

異例の復興部設置と 建物等の独自設計

単科大学にもかかわらず、キャンパス整備のために「復興部」が設置され、独自の設計がなされたいきさつは、『東京工業大学百年史』に概ね次のように記されている（注14）：「当時は、校舎の建設は大蔵省の営繕管財局で

設計・施工ということになっていた。しかし、東工大には各専門の教授陣が揃っていたので、どうしても自らの手で設計・施工をしたいという希望が全学に満ち溢れていた。そこで石井さんが先頭に立って、建物の配置や設計は東工大自身に任せて欲しいという交渉を大蔵省はじめ各方面にした。その結果、特例的に本学に復興部の設置が認められた。その活動拠点として、木造2階建ての建物が用意され、本格的な設計・施工に取り掛かることができた。設計図は震災後のことと耐震建築の研究をされていた谷口忠博士の手により出来上がった。現在本館の建っている辺りの地盤上、最も安定している場所を選定し、その他の土地でも高低の度合により高きは削り低きは埋める等若干土地を均した。従って土地を均したところは直ちに建物を建てないでチューリップ等を植えて一時花園とし土地が固まる迄数年放置し安定を待った。今日ではそこに図書館が立派に建っている。建物の建築もその1つ1つに石井さんは大変に気を配られた。こうしてでき上がった今日の東京工業大学には、土地にしても建物にしても石井さんの精魂がこめられているのである。

本学草創期に果たした石井さんの役割が高く評価され、昭和12年12月に、文部大臣（木戸幸一）の推薦により内閣総理大臣（近衛文麿）から“繁劇ナル事務二膺り格別勉励ス”として特別賞与5.29ヵ月分を支給されている（内閣文第1567号）。

4. 学科・研究所等の新設

石井さんは中村幸之助学長からの信任も厚く（注15）、事務官でありながら学科や研究所の設置にも並々な情熱を注いだ。専門分野の基本的な概念をよく勉強した上で（注16）、文部省との折衝に当たった。石井さんの仕事ぶりに関し、本学の創立100周年を記念した名誉教授たちの座談会で話題になっているので引用しておこう。

佐々木重雄 名誉教授 談（注16）（1899〔M32〕～1984〔S59〕、元精密機械研究所長）：「石井事務官のことですが、工大設置の時から関係し、これを仕上げることを一生の仕事にしていたようですね。精研の仕事で接触して驚いたことは、とにかく精研の仕事をやるとなると「精密機械部門とはどういものか調べるので、参考書を貸して欲しい」といって、自分で本を読んで実態をこなしてから、折衝にかかるんですね。それでも予算が文部省を通るには4年かかりました」。【昭和14年（1939）精密機械研究所、航空機工学科、資源化学研究所設置】

古賀逸策 名誉教授 談（注15）（1899〔M32〕～1982〔S57〕、温度非依存性水晶振動子の発明）：「…私の印象に残っていますのは、石井茂助事務官の目立った存在です。石井事務官を説得するのは容易じゃないとか、こんなことをされては困ると思っても、強引に押切られてしまうようなことを、当時の先生方からよく聞きました。当時の中村幸之助先生（1872〔M5〕～1945〔S20〕、1926〔T15〕～1942〔S17〕学長）は、いわゆる司令官で、全てのことは石井事務官にまかせきりで、非常に重く用いておられました」。

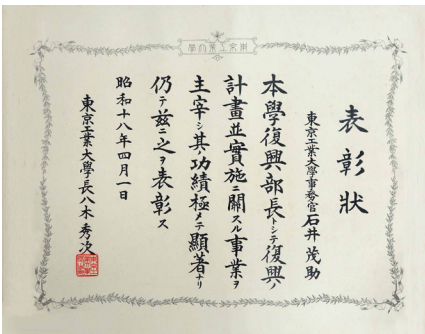
内田俊一 名誉教授 談（注16）（1895〔M28〕～1987〔S62〕、1952〔S27〕～1958〔S32〕学長）：「…私の前任地（商工省臨時窒素研究所）では、事務官というのは、石井事務官程偉い権限は持っていませんでした。ですから私は、工大に勤めてからも石井事務官に対して、前の研究所時代と同じようにしていたわけです。何か用があると事務官を電話で呼び出したり、「こっちへいらっしゃいよ」ぐらいの態度でいました。恐らく石井事務官は、私のことを「生意気だ」と思われたと思います。昭和13年（1938）、突如として石井事務官が「今度、化学工学科を創設するので、設置の趣意書のようなものを書いて欲しい」と言ってこられました。それまでは、学生をもっていない化学工学教室というものがありました。分析もそうです



- ④ 学科新設を伝える学内紙（東京工業大学 学友会、「工業大学蔵前新聞」発行、昭和14年〔1939〕12月11日）



- ⑤ 中村学長から石井さんに送られた書額「省内不疚」（内に省みて疚しからず。S16）。



- ⑥ 八木秀次学長から石井さんに送られた表彰状（昭和18年）。

し、物理化学も有機もそうでしたが、教室というのがいくつかありました（正式な「学科」以外の一般教育的なものは、全て「教室」という名になっていた）。石井事務官とは、時々考えの相違等でやりあったりしたことがあるのですが、そんなことにも拘らず、お前の方の学科を創設するのだというのでびっくりしたのです。【昭和15年〔1940〕日本初の化学工学科新設】

当時の学内新聞『工業大学蔵前新聞』でも、一面トップで学科新設を報じている（図④）。

5. 産学共同開発の支援

石井さんは、研究所の設置や施設整備の他に、産学共同開発をも側面から強力に支援した。フェライトの発明と実用化を成し遂げた加藤与五郎（1872～1967）・武井 武（1899～1992）グループで中心的役割を果たした武井さんが専門誌の「電気化学のあゆみ」コーナー（注17）で次のように述懐している：

「フェライト磁石のことを加藤与五郎先生が中村学長や石井茂助事務官にだいぶ宣伝したので、私達は新しい研究室を作ってもらったり、特別予算を頂いたりして磁石の研究がずいぶん楽になった。…磁石の性能が次第に向上した。…磁石は強くなっても、この磁石は金属磁石とは著しくちがうので、用途開発はとても困難であった。…石井事務官が文部省と交渉したらしく、学校はこの研究に対して原材料、機械器具の持ち込み、試作品の持ち出しなどに最大限の便宜を与えた。会社（三菱電機）は…技術員2名を派遣し…私の研究室からは3名が参加し、研究室は賑やかになり活気に満ちた。私は産学協同のうれしさを感じた。…開発は次第に本格的な用途に進み、…産学協同開発が実ったのである（1935年〔S10〕10月）。皆喜んだ。感慨無量であった。研究を開始してから約5年半、茨の道でもあったが、楽しい幸運な道でもあった、親身になって援助して下さった加藤先生、中村学長、石井事務官などに感謝するとともに産学協同の有効さをしみじみと感じた。成果は皆の努力の結晶である。…」

6. 福利厚生施設 海の家・山の家 の設置

石井さんたちは、昭和10〔1935〕年代に入り大岡山キャンパスの整備に目途が立つと、今度は学外に保養・研修施設を確保する努力を始めた（注18）。山岳部員が鹿沢温泉（群馬県吾妻郡嬬恋村）の南入口にある新鹿沢温泉に投宿し、毎冬 スキー合宿を行っていたが、この地に山小屋を建てスキーの基地



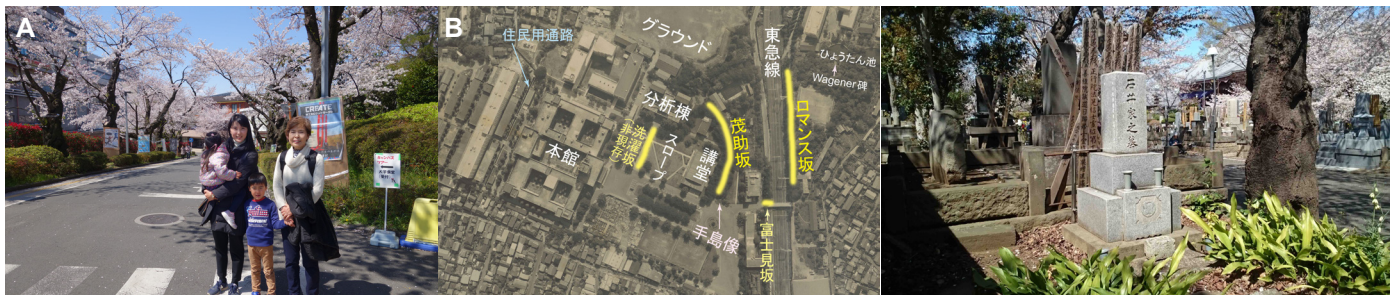
- ⑦ 鹿沢合宿研修所（1936年〔S11〕12月30日）。

にしたいとの要望が強くなった。そこで石井さんは山岳部の部長と協議し、適当な山岳保養地を取得することにした。こうして、山岳部員の大学への働きかけと鹿沢温泉 紅葉館主（小林亀蔵氏）へのお願いが奏功し、館主所有の一区画（19,438 m²）を寄贈して貰えることになり、昭和11年末に最初の「山の家」（鹿沢合宿研修所、約300 m²、図⑦）が実現した。

続いて、「海の家」として“大洗合宿研修所”が大貫海岸（茨城県東茨城郡大洗町大貫）に建てられた。この地に関しては、石井さんは毎年のように家族で海水浴に来ていたので親しみがあり、大貫町との交渉も順調に進み、無償で町から譲渡してもらうことが出来た。海の家は、黒松の林の中に、大小8棟（合計567 m²、土地全体では10,894 m²）が別荘風に散在する形で作られ、昭和12年〔1937〕の夏休みから利用に供された。

7. 茂助坂を含む学内環境 の整備（桜の植樹）

建物の建設が一段落すると石井さんはホッとする間もなく、キャンパスの景観にも気を配り、桜の植樹にとりかかった。桜といえば、本館前の桜並木が有名だが、本館が完成した当時〔1934、昭和9年〕は、本館の前庭及び中庭は、既にフランス風庭園として設計されていたので、そこは避け、最初の桜はスローブを囲むように（a）分析棟（現西1号館）の前や（b）グラウンドに向かう緩いカーブ状の道路沿い、及び（c）線路の反対側の口マンヌ坂に植えられたものと



⑧ (A) 70 周年記念講堂脇の茂助坂。奥は 2022 年に姿を消した学生食堂。人物：石井茂助の孫（松田克子）、ひ孫、及び玄孫たち（2019.4.3）。(B) 茂助坂の位置を示す航空写真（1966.6.26）。植栽については東工大一覧 昭和 15 年（1940）の付図参照。

⑩ 池上本門寺の境内にある石井家の墓。石井茂助の命日は 1948 年〔昭和 23〕4 月 10 日（『創立 70 周年記念講堂』が完成する約 10 年前）。この写真には写っていないが、左奥の仁王門に入って右折し、五重塔方向に進むと道の右側にある。右奥に写っているのは大堂（祖師堂）。撮影：2019.4.2.



⑨ ソメイヨシノの後継としてウッドデッキの外側に植えられたジンダイアケボノ（2021.3.12）。

9. 講堂建設の目途が立たないことを心残りに、かつ医学部の設置を夢見ながら、現役で病没（写真 ⑩⑪）

思われる。b 地点は、いつしか石井さんへの謝意を込めて、『茂助坂』と呼ばれるようになった（写真⑧）。

現在の本館前の桜並木は、1950 年〔昭和 25 年 3 月〕の卒業生が記念に植えたソメイヨシノで、そろそろ世代交代が必要となっており、2021 年の春先に代替品種としてジンダイアケボノが植えられた（写真⑨）。

8. 郷里の発展にも貢献し、名士に

石井さんは、福島から東京に出て成功した人として郷里では著名人だった。郷里に対する思いも強かったようで、(i) 親戚関係の子供たちを行儀見習いとして預かったり、(ii) 須賀川町第一国民学校創立 70 周年記念事業に多額の寄附をし、町長及び同校の同窓会長・後援会長から感謝状を贈られたり（昭和 17 年〔1942〕10 月 30 日）、(iii) 昭和 19 年には、戦時下で郷里の須賀川商業学校が工業学校に転換することに尽力し、町長と校長から感謝状を贈られたりしている。

戦時下の厳しい社会・財政状況下では、本格的な大型施設を作るのは難しく、石井さんの努力にもかかわらず「講堂」は実現できなかった。戦後間もない昭和 26 年〔1951〕に本学創立 70 周年を迎えるにあたり、卒業生や職員などから寄付を募って『創立 70 周年記念講堂』を建設することが計画され、和田小六学長が中心となり募金が始まった。3,000 万円の目標に対し、約 5,200 万円もが集まった；当時の敗戦からの復興途上の日本の状況を考えると、破格の金額で、同窓生らの本学に寄せる期待がいかに大きかったかがよく分かる。竣工は 1956 年〔昭和 31〕と銘板に刻まれているが、細部の仕上げを含めると、完成は 1958 年〔昭和 33〕あるいは中間の 1957 年〔昭和 32〕頃と記される場合もある。この講堂は、初期に建設された「本館」と「分析棟」（現西 1 号館）と並んで“登録無形文化財”に登録され、大岡山キャンパスの見どころの 1 つとなっている。石井さんは、残念ながら、講堂建設の機運が高まる創立 70 周年（1951）が近づいた頃に亡くなった（1948 年）。

石井さんが倒れたときの様子を、石井さんを師と仰ぐ文部事務官 板谷健吾氏が次のように振り返っている（注 19）：「或る日、私が石井さんを訪れ、お話しをしている途中で、突然倒れられ大変 吃驚（きつきょう）致しました。後で奥様に伺ったところでは、かねて

から、糖尿病と腎臓病で糖分と塩分の双方を制約されて居られ、「板谷君は、鹿児島くんだりまで行って、家族共々苦勞しているなア」と考えられたとたんに目がくらんで倒られたとのことであった。数か月後に石井さんは亡くなられたが、同氏の温かい心くばりを思うと今でも申し訳ない気持ちであり、深甚な感謝と心かなるご冥福をお祈りする次第です」。

戦時中、石井さんは「是非とも本学に医学部を作りたい」と、近親の方に語っていたそう（百年史 通史 661 頁）。その夢が思わぬ形で実現するかもしれないというニュースが 2022 年 8 月 8 日に NHK ニュースで流れ、翌 9 日には、本学も正式に「国立大学法人東京工業大学と国立大学法人東京医科歯科大学の統合に向けた協議を開始」することを発表した。石井さんが亡くなって 74 年、本学に生命理工学部が創設されて 32 年目の試みが成就することを願ってやまない。

10. 家族のことなど

石井さんは、熊本出身の気丈な婦人（覇穂〔ツルエ〕）と結婚し、4 人の子供に恵まれた；最初の子供は双子の女兒で多穂子（たえこ）・千穂子（ちえこ）と名付けられた（写真⑪）。ここでは、この二人を中心に紹介し、本稿を書くきっかけになった孫の話に繋げたい。参考までに石井さんの娘婿（細田



⑪ 双子の姉妹 石井多穂子・千穂子
(幼稚園児の頃)。



⑫ 石井茂助事務長の葬儀の際の家族(左から:細田一夫〔娘婿〕, 細田多穂子〔長女〕, 正晃〔長男〕, 轟穂〔妻〕, 久子〔3女〕, 千穂子〔長女〕; 右後方:鈴木春雄事務員, 石井事務長を尊敬しており, 石井家によく出入りした。墓の前で寝泊まりしたという逸話が残っている)。

一夫(注20)の妹の長男が本学で学生時代を過ごしている(佐伯信雄, 昭和43年〔1968〕化工修士卒, 東レ入社)。

娘の多穂子さんと千穂子さんは、1926年(大正15)に東京市麹町区飯田町で生まれ、父の本学勤務に伴い、学内宿舎に引っ越し、そこで幼少期と青春期を過ごした。宿舎の近くには憩いの植物温室(1932年〔昭和7〕頃設置)や、その少し先には“ひょうたん池”もあった。多穂子さんは1944年〔昭和19〕18歳の時に、小笠原写真館の店主の仲人で、本学の卒業生(細田一夫, 30歳)(注20)と結婚した。小笠原写真館は卒業アルバムの制作を引き受けるなど本学と関係が深かった。

1945年〔昭和20〕5月24日夜の東京大空襲で線路の北側は大きな被害を受け、現在の「80年記念館」の近辺にあった木造宿舎が全焼した(富士見坂近くの線路上の橋の欄干が焼夷弾の直撃を受けV字状に曲がっていたそうだ)。近くの北千束宿舎(北千束町790番地)は難を逃れたので、石井一家はそこに移り住むことができた(図3, 右上)。

細田一夫・多穂子夫妻には3人の子

供があり、長女(細田克子 後の松田克子)は終戦直後の1946年〔昭和21〕に生まれた。石井さんにとって初孫の克子さんは可愛かったと思うが、石井さんはわずか2年後の1948年〔昭和23〕に、持病(高血圧・糖尿病・腎臓病)を悪化させ亡くなった(写真12); 長年の過労もたたったのだろう。大黒柱を失い、第3子(長男)が高校生、末っ子の3女が小学生だったゆえ、恩給での生活となると家計は大変だったに違いない。

克子さんは少し大きくなると父(細田さん)に弁当を届け、学内の温室やひょうたん池の周り、さらにはワグネル記念碑や手島精一像に登って遊んだそうだ。父の工業技術院への転出で世田谷の公務員住宅に引っ越してからも、克子さんは体が丈夫でなかったため、レントゲン取りによく本学の保健室に来た。「工大祭」もよく見に来たが、自動車部が学内遊覧運行で、「ここが『茂助坂』と言いまして…」と紹介していたのは今も鮮明に覚えているそうだ。

多穂子さんが主婦の道を歩んだのに対し、双子の相方である千穂子さんは、キャリアの後半を米国で過ごすという、時代の先を行く職業婦人の

道を切り拓きながら歩んだ。1944年〔昭和19〕までは国会に女性速記者の採用制度がなかったが、見直されることになり、翌年から衆議院速記者養成所の採用試験に女性も応募することが可能になった。そこで千穂子さんは試験を受け、女性第1期生として養成所に入り、2年間の修業の後に無事 衆議院速記者になった(注21)。戦犯を裁いた「東京裁判」の速記者も務めた。

千穂子さんは高校の頃から英語の勉強にも熱心で、速記者をしていた頃は毎日のように在日米軍向けのラジオ放送 FEN (Far East Network) を聞き、渡米1年前には衆議院速記者をやめて、京都のインターナショナルカレッジで1年間英語の勉強をして、フルブライト奨学金に応募し狭き門を無事通過した。公費で米国の大学で学べることになったのだ。妹(3女の久子)が大学を卒業し、結婚したのを機に、1964年8月、横浜港よりクリーブランド号でカリフォルニアに向けて出発した。20日ほどの航海中も英語力の向上に努めた。カリフォルニアでは義兄(細田一夫)の従妹がオレンジ農場を経営していたので、出迎えてもらい、インディアナ州のマリアンカレッジ (Marian College,

現 Marian University) に向かった。Marian College では統計学を学び、保険の仕事に就いた。働きながら大学院でも学び、専門性に磨きをかけた。定年退職後は西海岸のワシントン州ポートランドに住み、カソリック信者として教会での布教活動にたずさわった。千穂子さんには直接コンタクトできなかったが、多穂さんは取材時点(2019年3月初旬)では92歳で存命だった。しかし、体力的に、父が率先して植えた「茂助坂の桜」(茂助桜)を見に出かけるのは、もはや叶わないとのことだった。

 (注1) 石井茂助：a) 東京工業大学六十年史，pp. 764-765, 1940年；b) 山田良之助，「大岡山今昔」，東京工業大学70記念誌，pp. 48-49, 1951年〔昭和26〕；c) 板谷健吾，文経会会報 No. 10, pp. 2-3, 1983年；d) 東京工業大学百年史 通史，p. 644, 659-661, 713-714, 1985年；e) 岡田大士，博士論文「東京工業大学における戦後大学改革に関する歴史的研究」，pp. 51-52, 2005年；f) 東京工業大学130年史，p. 91, 347, 2011年。

(注2) 本校の大学昇格は、紆余曲折を経て、1923年〔大正12〕3月23日の帝国議会で予算通過で決まったが、その年の関東大震災で延び延びとなり、1929年〔昭和4〕ようやく実現した。

(注3) 前身の東京高等商業学校が大学に昇格したのが1920年〔大正9〕。

(注4) 羽田貴史，「東京商科大学経理事務講習所と文経会」，東北大学史料館だより No. 8, pp. 2-5, 2008。

(注5) 上山定治，「随想“文経会”のことども」，文部省虎の門会ニュース 第7号，pp. 2-4, 昭和60年(1985)。

(注6) 『文経会の50年』昭和54年10月(1979)。◆東京商科大学経理事務講習所文経会，『文経会雑誌』1号(大正15.12) -16号(昭和10.7)。

(注7) 板谷健吾，「官舎住まいの愚痴」，文部省虎の門会ニュース 第13号，pp. 2-4, 昭和58年(1983)6月15日号。

(注8) 大岡山キャンパスの成立過程

については、東京工業大学百年記念館第12回特別展示・講演会『東工大岡山大岡山キャンパス—その歴史と未来』で詳細な解説がなされた。図録等の冊子は制作されなかったが、博物館には展示パネルの図と解説が残されているので、全体像は把握できる。この特別展示は、本学が創立130周年を迎えるにあたり種々の記念行事を企画した際に「東工大130協賛事業」の一つとして実施したもので、建築史が専門の藤岡洋保教授(現名誉教授)が実行委員長を務めた。開催期間：2010年11月4日(木)～12月3日(金)。◆川崎真記子(藤岡研究室)，修士論文「東京工業大学大岡山キャンパスの形成過程」，2011。

(注9) 資史料館とっておきメモ帳 No. 12「特定歴史公文書等になった現存最古の入試問題—関東大震災で蔵前キャンパスが灰燼に帰した半年後の入学試験」，2018。

(注10) 猪瀬直樹，『土地の神話』，小学館文庫，2013。週刊ポストに昭和63年〔1988〕1月から36回にわたって連載された記事を後に文庫化したもの。◆筒井清忠，『帝都復興の時代—関東大震災以後』，中公選書，中央公論新社，2011。

(注11) キャンパスの再移転に反対するビラ(図13, p.9)：「ごく少数の地主が頑として不当なる土地価格を主張し、全く協調の余地なきまでに行き詰まったのであります」として現状を嘆き、「東工大なくして大岡山の発展なし」という趣旨の主張をしています。注8の特別展示のパネル No. 15。

(注12) 「2回目の土地交換」については、『大岡山キャンパス展』(2010)のパネル No. 12 & 15では次のように説明されている：2回目の土地交換は、主として、昭和4(1929)年の本学の大学昇格にともなって必要とされる中心的校舎「本館」の用地取得のためであった。当該地の取得に際し、当初より非常な困難が予想されたので、本学は、目蒲電鉄(旧・田園都市線)に地主と交渉し土地を取り纏めることを依頼した(1930〔昭和5〕年7月をその期限とした；震災復興事業が昭和5年度までであったため、その期限内にどうしても用地取得の契約を結び、

移転事業の準備を整えておく必要があった)。目蒲電鉄としても、本学から二子玉川線(現・大井町線)の線路用地を再取得する必要があったのである。このときの用地取得に中心的役割を果たしたのは、本学事務官・石井茂助と、目蒲電鉄専務・五島慶太(東急電鉄の創業者、1882～1959)とである。2回目の土地交換はそれでも難航し、一時は大岡山の地を捨てて他に再移転することも検討されたが、昭和5(1930)年7月には、一部に未買収地(地主と未契約の土地)を残していたものの、大岡山キャンパスの建設が決定した(土地所有権の移転は昭和6年1月から昭和10年3月にかけて行われた)。

(注13) 工業大学新聞，第447号，昭和23(1948)年5月1日発行。

(注14) 東京工業大学百年史，通史 pp. 660-661 ◆板谷健吾，「桜花の下東京工業大学事務官石井茂助先生を憶う」，文経会会報 No. 10, pp. 2-3, 1983。この会報の記事が縁で同年の文経会総会で「石井茂助先生追慕観桜会」を石井さんの命日である4月10日前後に行うことが決まった。実施に当たっては、大学事務局の格別の協力を得て、石井さんが住んでいた宿舎の跡地近くに建てられた「創立80年記念館」に、石井さんを知る文部省と東工大の関係者及び文経会会員が集い、石井さんの長女細田多穂子さん夫妻を囲んで語り合い、昼食をともにし、満開の桜並木を散策、故人を偲ぶ形で進められた。この会の中心人物だった板谷健吾氏(注19)は最初の2回のみのお出席で、昭和60年〔1985〕7月7日に80歳で亡くなった(文経会会報 No. 15, p. 5-7, 1986；文部省虎の門会ニュース No. 19, p. 2-3, 1986)。

(注15) 東工大クロニクル，「本学の歩んだ途，本学創立100周年記念行事“名誉教授を囲んで座談会(その1)”」，No. 70, p. 1-3, May 1975。

(注16) 東工大クロニクル，「本学の歩んだ途，本学創立100周年記念行事“名誉教授を囲んで座談会(その2)”」，No. 72, p. 1-3, July 1975。

(注17) 武井武，「フェライトとともに(1)」，DENKI KAGAKU 55, No. 11, 818-821, 1987。

(注18) 東京工業大学六十年史，第二編 後史，pp. 764-766, 1940。参考：時代が昭和・平成・令和と変わるにつれ，レジャー・合宿・研修のスタイルも様変わりし，大学の保養施設の稼働率が大きく低下した。この傾向を受け，平成の半ば頃から廃止・譲渡が検討され始め，令和4年〔2022〕3月30日には鹿沢合宿研修所及び木崎湖合宿研修所（長野県大町市，1966，1,448 m²，廃止決定は平成19年度）の譲渡計画が文部科学大臣によって認可されている。

(注19) 板谷健吾，「官舎住まいの愚痴」，文部省虎の門会ニュース 第13号，pp. 2-4，昭和58年（1983）6月15日号。◆板谷健吾（佐賀県出身，写真14）：



経理事務講習所の3回生，本学へは石井さんより2年早く赴任し，石井さん着任後は部下として長く

一緒に仕事をした；少なくとも「東京工業大学一覽」が残されている昭和17年度までは職員欄に板谷さんの記載がある。昭和18年から21年まで司政官として南方に赴任，復員後，本学の研究協力部に復帰，その後 鹿児島師範学校（現鹿児島大学）に赴任。

古賀逸策名誉教授の板谷さん評：「歴史上からは隠れたものになるのですが，先程，佐々木先生も言われた石井事務官のもとで活躍した板谷さんですが，その後仙台に行かれました。東北大学があれ程急に大きくなったのは，板谷さんの力によったということを私は知っています。そういう有能な部下を持っていたということは，本学のためにも何かと役に立っていたのではなかったかと思います」（東工大クロニクル No. 72, p. 2 右下, July 1975）。結婚：板谷さんは同じ事務員だった小堺帛三郎の義妹シノ子と結婚したがそのお膳立てをしたのが石井さんだった（文経会会報 No. 10, 1983）。◆孫（松田克子）が伝え聞いている話では，石井さんは高血圧で酒好きだった。現職中に亡くなったので墓は用意されておらず，大学側が池上本門寺に相談したようだ（写真10）。

(注20) 細田一夫：娘婿の細田さんは，1914年〔大正3〕生まれ。学生時代は剣道部に所属。本籍地は山口県萩市だが，生まれは大阪府三島郡高槻，中学時代は神奈川から熊本。1939年〔昭和14〕に本学の紡織学科を卒業し，陸軍千住製絨所等を経て，1945年〔昭和20〕

本学の講師となり，1953年〔昭和28〕工業技術院 繊維工業試験所，1959年〔昭和34〕農林省 蚕糸試験場 絹繊維部長等を歴任し1972年〔昭和47〕退職。この間の1947〔昭和22〕～1973〔昭和48〕日本女子大非常勤講師，定年退職後は昭和女子大学（教授，S48.4～S61.3），東京家政学院（非常勤），東京芸術大学（非常勤），女子美術大学（非常勤）などで教鞭をとった。

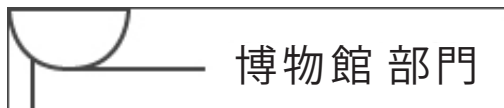
(注21) 婦人新報（旬刊）第30号，「国会の舞台裏—国会速記者 石井千穂子さん」，昭和25年7月21日発行，1950。◆衆議院事務局記録部，「衆議院速記者養成所五十年史」，第三編（昭和十四年—昭和二十三年），三 女子生徒の採用，p. 64, 1968。

速記者養成所に関しては，コンピュータによる新システムの導入により速記者を養成する必要がなくなったことから，2019年7月に約90年の歴史に幕が下ろされた。

2022年12月

文：広瀬茂久

発行：博物館 資史料館部門



博物館 部門

東京工業大学 博物館



資史料館 部門

152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1-E3-12 03-5734-3340 centsshiryu@jim.titech.ac.jp
http://www.cent.titech.ac.jp/

佐藤 勲（館長，総括理事・副学長）
山崎鯛介（教授，副館長，博物館部門長）
広瀬茂久（特命教授，資史料館部門長）
奥山信一（教授，兼任）
金子寛彦（教授，兼任）
野原佳代子（教授，兼任）
大竹尚登（教授，兼任）
服部佐智子（研究員）

山中章江（研究員）
浅井善朗（事務職員）
佐々木裕子（事務限定職員，学芸員）
桐明紀子（事務限定職員，学芸員）
下角彰子（事務支援員）
渡辺菊乃（事務支援員，資史料館）
鎌田祐輔（事務支援員，資史料館）
本間英子（事務支援員，資史料館）

和田康義（事務支援員，資史料館）
竹内 龍太郎（事務支援員，資史料館）
渋谷真理子（事務支援員，資史料館）
広報課（博物館担当）
牧野崇行（課長）
尾崎有美（広報戦略グループ長）
資史料館：045-924-5501

大岡山の運命旦夕に迫る

工業大學は他に移轉する？

東京工業大學敷地問題の危機

に際して關係諸君に訴ふ

三年來の懸案であつた東京工業大學の敷地擴張問題も愈々破綻の瀬戸際まで押寄せました。

池上、碑衾、馬込の三町長を始め有ゆる方面の有志家が此の問題の爲めに、而かも長時日に亘り今日まで悪戦苦闘を續けて来たにも拘らず、一二強慾なる地主は矢でも鐵砲でも持つて来いと云ふ氣勢で頑として不當なる土地値段を主張し、全く協調の餘地なきまでに行詰つたのであります。

専門學校以上の敷地を得るに當つて、土地收用法を適用したことは曾てないと言はれる程一般地主は土地の提供に精進したのであります。當地は大岡山の工業大學か、工業大學の大岡山かとまでに親しみと因縁のある當地です。此の工業大學の敷地を得るに當りまして新しくまでに頭張る地主と云ふものも亦日本全國未だ曾て其類例を見たことはないと確信するのであります、即ち此の類例のない強慾地主に向つて類例のない收用法を適用するのは誰れか其の當然を疑ふものがありませうか。

聞く處によると工業大學と目黒蒲田電鐵會社との土地交換契約は此七月十一日が満限であつて此の満限までに地主の承諾がない限り工業大學は大岡山に居るか居らぬかが餘程緊切の問題となつて来る模様であります、若しも此の工業大學が大岡山から其の姿を隠して或は三鷹へ行くとか或は國立へ移るとか云ふ事になりましたなら大岡山の繁榮、大岡山の隆昌は果して如何に成行くでせう。

我々は茲に斷然として起ち上る必要があります、我々の正義觀念はこの強慾地主の厚懲を要求するのであります。我々の生存權は工業大學の本建築を此の地に要求するのであります。そして新しくも重大性を帯ぶる此二つの目的を達成するの道は一に懸つて此の強慾地主に收用法を適用し以つて工業大學を満足に得ることより外に何もありません。

皆さん七月十一日は目前に迫りました、一日遅れば一日の危機を増す譯であります。多くの有志家も無論大車輪で動いて居ることでありませう。我々も到底安閑としては居られません。

そこで、左記の事項によつて移轉反對期成大演說會を開き一路目的に向つて邁進せんとするにあるのみです。當日は晴雨に拘らず是非共御來會御聲援の程御願致します。

左記

- 一、時日 來る七月七日午後七時
- 一、場所 大岡山南本通り赤松稻荷裏(河野方)
- 一、辯士 代議士高木正年氏外地方有志多數

さらば諸君よ

我が、大岡山を救へ！
我が、大岡山を守れ！

昭和五年七月五日

東京工業大學移轉反對期成同盟會

13 キャンパスの再移轉に反対するピラ

西暦	和暦	できごと（東工大・石井茂助〔1897年（M30）12月23日福島県生まれ〕）
1916	大正 5	石井茂助，文部省雇（18歳）
1923	12	東京高等工業学校（本学の前身）：関東大震災で蔵前キャンパス消失
		霧穂（ツルエ）と結婚
1924	13	東京高等工業学校：大岡山の仮校舎に移転。東京商科大学（現一橋大学）：会計官吏養成所「経理事務講習所」開設；講師の1人として後輩を育成；【7年後の1931年〔昭和6〕に廃止】
1926	15	文部省 大臣官房 会計課 予算掛長 兼 決算掛長（28歳）；(10/16) 双子の女兒誕生：多穂子 & 千穂子（東京市麴町区飯田町） 図11
1927	昭和 2	新設官立大学創立委員補助として，本学の創設準備を担当（29歳）
1929	4	東京工業大学発足に伴い，初代事務官（現在の事務局長）に就任（31歳）；学内宿舎（目黒区大岡山30） 図2 。大岡山キャンパスの飛び地解消と統合に奔走（現在本館のある場所は取得できていなかった） 図2 ， 3
1930	5	フェライトの研究と事業化を強力に支援
1931	6	復興部部长として本館を中心とする学舎建設に尽力；長男 正晃誕生（2005年に没，74歳） 【分析化学棟（現西1）1931.9竣工，水力実験室 1932.8，建築材料研究所 1933.3，本館 1934.8】
1936	11	福利厚生施設（山の家 & 海の家）の建設， 図7
1937	12	特別賞与（職務格別奨励，1,500円 = 5.29ヵ月分）
1939	14	精密機械研究所の附置に際し，専門書を読んで基礎知識を得た上で予算折衝。；細田一夫，本学の紡織学科を卒業
1940	15	化学工学科の創設（内田俊一教授）に尽力
1941	16	3女久子誕生
1943	18	復興部部长としての功績に感謝状（八木秀次学長から） 図6
1944	19	(6/1) 郷里の須賀川商業学校が工業学校に転換することに尽力し感謝状；(7/15) 長女の多穂子，細田一夫と結婚。
1945	20	(5/24夜) 東京大空襲で学内官舎消失／北口方面火災；仮設から，北千束宿舎〔大田区北千束町790番地〕に引越し；翌S21年，孫の細田克子誕生
1948	23	(4/10) 在職中に死去（50歳）。生前の19年間に及ぶ功績に感謝し，大学関係者が中心となって，池上本門寺の境内に石井家の墓を建立（ 図10 ）。